地球追遥

ボルネオ Borneo

熱い畏敬

**島としては世界で3番目に大きいボルネオ。
その北端にあるサバ州は
熱帯雨林におおわれた動植物の宝庫。
熱帯であるからこその光景に旅人は畏敬の念を強く抱く。**

文＝高梨好夫　撮影＝柳生雄弐

*熱帯雨林の中をいく北ボルネオ鉄道。SLが牽引する観光列車はサバ州立鉄道の線路を使用して運行されている。鉄道ファンならずともおおいに楽しめる。

緑の風が車窓から
北ボルネオ鉄道ＳＬの旅

マレーシアの国土は首都クアラルンプールがあるマレー半島の部分と南シナ海を挟んだボルネオ島の部分に大別され、ボルネオ島の部分は国土の6割を占める。島の北側にあるサバ州の州都コタキナバルは人口およそ55万。中心部の南にあるタンジュンアルには北ボルネオ鉄道の始発駅がある。ここから週2回、蒸気機関車に牽引される観光列車が発着する。

午前10時の発車を前に、駅の前には観光客をのせたバスが次々と到着した。切符とパスポートと記された小冊子を受け取り改札へ。そこでまず、タンジュンアルの駅名のスタンプをパスポートに押してもらう。ホームの先に機関車の緑色の車体が見える。煙突からは白い煙。ＳＬに引かれる列車に乗るのは久しぶり。胸わくわく。

発車まで時間がある。ホームの端まで見に行った。パスポートの説明では、１９５４年のイギリス製。ＳＬは炭水車を含め17㍍余り、重さは85㌧。軌間は１０００㍉。炭水車を見ると薪が山積み。薪で走るＳＬは初めて見た。次はキッチンカー。係の人が飲物を用意している。その後にクリーム色と緑に塗り分けられた客車がつづく。客車の後ろのプレートには、ＫＯＢＥ１９７５ＪＡＰＡＮの文字。

中に入ると木を多用したクラシカルな造り。天井で扇風機が回っている。乗降口のドアも手動だ。長い汽笛とともに列車が動きはじめた。空港、海、畑、ジャングルの中。線路脇で子どもたちが手を振っている。仕事の手を休めて男たちも手を振る。列車が過ぎると踏切の番人がハンドルを回して遮断機を上げている。のどかだ。駅を過ぎると係員が駅名のスタンプを押して回る。スタンプが増えていくのがうれしい。

この鉄道は19世紀末に内陸の農産物を運ぶためにイギリスによってつくられ、コタキナバルまで延ばされたのは20世紀初頭。太平洋戦争では日本軍に破壊されたが復旧された。折り返しのパパール駅に着いたのは正午前。片道38㌔の旅だった。切り離された機関車が転車台で方向転換。その様子を見ようとホームの上は人が鈴なり。

駅前のマーケットを散歩し、列車に戻ると4段重ねのお弁当が配られた。食べている間に列車は駅を離れた。ジャングルの中を走る。緑に染まった風が開け放した窓から入ってくる。カタンコトンのレールの音も心地いい。

上／SLの車輪は前輪2、動輪6、従輪2。中／ロゴマークは王冠の上に立つトラが車輪を支えている。下／ランチはチキン入りチャーハンなどのマレー料理。

上／発車を前にウェルカム・ドリンクが供された。そのあと朝食も。右／途中駅のキルナートで駅周辺を散策する時間もある。

途中駅のキルナートでは駅前のマーケットを見て歩く時間も。屋台のサテー（串焼き）がいい匂い。

上右／トリノスシダから飛び出してきたルリビタキに似た鳥。上中／ピンクメイデン。その実は一年を通じて鳥たちの餌となっている。上左／これもランの仲間で花は公園内で最小。

大きなものは1mに近くにもなるというラフレシア。ブドウ科の植物の根に寄生する。

世界遺産 キナバル公園 熱帯雨林の多様

ガイドさんの説明を熱心に聴く。熱帯雨林の植物園は驚くことばかり。

コタキナバルの北西に聳える標高4095㍍のキナバル山は東南アジアの最高峰。その周辺は熱帯雨林から高山帯にかけて多様な動植物の宝庫で世界遺産に登録されている。コタキナバルから車で1時間走るとラナウという村に着いた。ここはキナバル公園へ向かう観光客の休憩所。駐車場のそばに展望台があった。そこからはキナバル山が間近に見渡せた。山腹は緑におおわれているが頂上近くは岩がむき出し。岩峰がいくつも見え、奇怪な形をしている。山麓の村では、死者の魂が還る場所と伝わる。

頂上付近には20ものピークがあり、最も高いピークはローズピークと名付けられている。西洋人としてこの山に最初に登ったイギリス人植物収集家のヒュー・ローにちなむ。19世紀半ば、ローは未知の植物を求めて登り、多くの珍しい植物を採取したという。現在では5千種以上の植物が確認されているそうだ。

さらに車で1時間、キナバル公園の植物園に着いた。ここの標高は1600㍍ほど。ひんやりとした空気。歩きはじめると白やオレンジ色のランが鮮やかに。ここで見られるランは700種を超えるという。食虫植物のウツボカズラは25㌢もあってその大きさにびっくり。高い木性シダが大きな葉を広げる。シダの類は600種以上。訳すとトリノスシダと書かれた説明が目についた。広げた葉の根元に枯れた葉がかたまり膨らみをつくっている。見上げていると青い鳥が飛びだしてきた。本当に鳥の巣だったのだ。

世界最大の花ラフレシアは咲いていないという。できることなら見てみたい。ガイドさんがあちこち電話して探してくれた所は小さな施設。竹が生い茂る斜面の脇、丈の低い草に囲まれて2つ咲いていた。白い斑が入ったオレンジ色の大きな花びらが5枚。直径は50㌢ほど。咲いた花は数日で枯れるそうだ。寄生植物で根も茎も葉もない。こんな大きな花を咲かせるまで養分をとられる宿主は大変だなあと思いつつ、世界最大の花を見ることができて満足。

キナバル山は花崗岩でできている。地下深くで固まったマグマが1000万年前に隆起してできた。山麓の村の人々にとっては聖地でもある。

オランウータンに会える シャングリ・ラ・ラサリア・リゾート

コタキナバルの北およそ20キロメートル。南シナ海に面したダリットビーチにシャングリ・ラ・ラサリア・リゾートがある。西側は海、東側は森に囲まれ、世界とは隔絶された趣のあるリゾートホテル。162㌶の広大な敷地の中には野生動物が数多く棲む26㌶の自然保護区がある。その一角にオランウータン保護センターがある。午前10時。建物の前に行列ができている。ここに保護され、リハビリテーションを受けているオランウータンの食事の様子を見学する人たち。

マレー語で「森の人」を意味するオランウータンはボルネオとインドネシアのスマトラ島の熱帯雨林にのみ生息する類人猿。近年、野生のオランウータンが激減している。原因は森林伐採による森の減少、ペットとして売買するための密猟などがある。サバ州では絶滅の危機から救うためさまざまな取り組みをしているが、このホテルの活動もその一環。

レンジャーからレクチャーを受け森の中を5分ほど歩くと見学用のテラスがあった。目の前には立木を利用したステージ。その上に餌を広げレンジャーがオランウータンを呼ぶ。すると遠くの木の枝が揺れた。見学者がどよめく。枝を伝って姿を見せた1頭、体も小さく顔もあどけない。ここでは親からはぐれたり怪我をした子どものオランウータンを保護している。そしてもう1頭。こちらはひと周り大きい。好物なのか2頭ともバナナをほおばっている。

お腹が満たされたのだろう、大きいほうは森に姿を消した。だが小さいほうはテラス近くの木から木へと移動し、枝にぶらさがったり、幹にしがみついたり。チンパンジーと並びヒトの次に知能が高いといわれている。その姿は遊んでいるようにも、人間を観察しているようにも見える。

上／目の前には長さ3kmにもおよぶ美しいビーチがつづく。中・下／人間の子どものような愛らしい表情につい頬がゆるむ。

上／海と森に囲まれたリゾート。プールやビーチへのアクセスも緑の中を。下／ガーデン・ウィングの客室は326。スタンダード・ルームでも36㎡と十分なスペースを確保している。

右・下右／レストランは5カ所。コーヒーテラスでは洗練されたマレー料理を楽しめる。下左／敷地内のダリットベイゴルフ＆カントリークラブ。

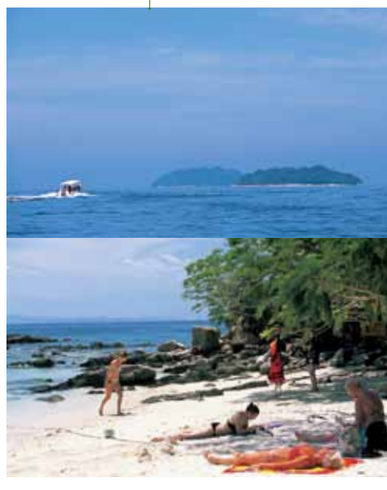
地球追遥

国立公園内に5つある島のなかでもサピ島は一番の人気。波静か。

上／木陰の下でバーベキュー・ランチ。青い海が食欲を刺激する。左／クアラルンプールからきたという娘さんたちも大満足。

地球遥遥

コタキナバルからボートに乗れば、そこは別天地。ゆっくりと島の時間が過ぎていく。



沖合に浮かぶサピ島
海の青さに染まる

今日は小島に渡ってピクニック気分を味わうつもり。コタキナバルの海際に立つと5つの島影が見える。そこは国立公園に指定されているトゥンク・アブドゥル・ラーマン公園。豊かな自然が残っているという。手前の大きい島はガヤ島。海に沿って広がる水上集落が見える。その左、ガヤ島に寄り添うように小さな島。それがこれから行くサピ島。

桟橋からボートに乗った。深い青をたたえた海原を20分ほど。海風が爽快だ。遠くにギザギザの山頂部をもつキナバル山が薄墨色のシルエットとなってぼんやりと浮かんでいる。ボートがスピードを落とし浅瀬に近づくと透明度の高い水の下の砂の白さが際立っている。エメラルド・グリーンとターコイズ・ブルーに区分けされた海。小魚が群れをなして泳いでいる。ビーチにも海の中にもたくさんの人。強い日差しの下で海とたわむれている。

初めてのサピ島、どんな所なのか歩いてみた。広い砂地の所にテントが並んでいる。ランチのブッフェのためのものだろう。周りにはクロスをかけたテーブルとイスが並んでいる。その先には小さいながらも売店、軽食の店。トイレ、シャワー、更衣室も。シュノーケルなどのレンタル料金表、島内をめぐるトレイルがのった地図の看板が立っている。一日たっぷり遊べそうだ。

ビーチの奥は緑の壁。高い木が鬱蒼と茂るジャングルだ。そこには大きなトカゲが徘徊しているそうだ。海の青、砂の白、ジャングルの緑。その色の組み合わせが、熱帯にいることをあらためて教えてくれる。

木陰の椅子に座って海を眺めていると、どこからかいい匂いがただよってきた。このピクニックはバーベキューのランチ付き。泳いでもいないのに空腹を覚えるのは、おいしい空気と光と青い海のせいだろう。

タンジュンアルは夕日の名所でもある。心地よい潮風を浴びながら。

プリミティブと洗練の妙を五官で味わう旅へ。
詳しくはP42を。

シャングリ・ラ・タンジュンアル・リゾート
贅沢に過ごす休日

北ボルネオ鉄道の始発駅があるタンジュンアル。その近くの岬にシャングリ・ラ・タンジュンアル・リゾートがある。ボルネオで過ごす最後の一日はホテルステイを楽しもうと決めていた。日が高くなってからベッドを抜け出しバルコニーに出た。目の前に広がる南シナ海。そこに浮かぶ島影。昨日遊んだサピ島も見える。

朝食のあと庭を歩いた。ヤシの葉が風にそよぎ、熱帯の植物の緑に心がなごむ。このホテルは空港にもコタキナバルの市街にも近い。しかし喧騒とは無縁の静けさ。ホテルを囲む緑が耳も気持ちも落ち着かせてくれる。

海側から眺めるとメインロビーをはさんで客室棟のデザインが異なっている。右側がタンジュン・ウィング、左側がキナバル・ウィング。両ウィングに492の客室がある。タンジュン・ウィングはシービュー、キナバル・ウィングはシービューとマウンテンビューの部屋が用意されている。南シナ海をとるかキナバル山をとるか迷うところだ。

子どもたちの歓声が聞こえてきた。その声に引かれていくと、大きなプールがあらわれた。中ほどには木が立っている島もある。大人用のインフィニティプール。水面の先にはガヤ島が横たわっている。まるでプールの水面と海がつながっているようだ。こんな景色なら本も読まずにずっとプールサイドで過ごしていられそう。自然と人工の精妙な組み合わせ。

夕方、部屋から眺めると西の空が淡いオレンジ色に染まっている。きれいな夕焼けを見られるだろう。1階に下りてサンセットバーに向かった。波打ち際からのびた路がバーにつづいている。夕日はその方向に沈む。その演出が心憎い。このひと時をこのバーで過ごしたいとだれにも思わせる。テーブルはすでに埋まっている。カウンターに席をとった。やがてオレンジ色の夕日と水平線が交わり、この日最後の光がさらに空を赤く染めた。沈む夕日にカメラが向けられる。SLの煙と汽笛、キナバル山の険しい山容、可憐な花々、ラフレシア、オランウータンのかわいいしぐさ…ボルネオの旅の断片がグラスに浮かぶ。とことん楽しませてくれたボルネオに乾杯。厚い畏敬の思いを込めて。

上から／インフィニティプールは2000㎡と広大。朝食ブッフェが供されるカフェタトゥー。バラエティ豊富なメニュー。右／本格的な中華料理、飲茶も味わえる香宮（シャンパレス）。

下右／スパChi（氣）はオープンエアでの施術も。下左／タンジュン・ウィングは4階建て。バルコニーからは雄大な海の景観が望める。

地球遥遥